



むらた・れお ●1953年生まれ。1975年東京大学理学部数学科卒業。1982年東京都立大学大学院理学研究科博士課程単位取得満期退学。1982年明治学院大学一般教育部専任講師。同教授を経て、2000年同大学経済学部教授。経済学部長、副学長等を歴任し、2020年より現職。理学博士。専門分野は解析的整数論。



明治学院大学・学長
村田 玲音

荒波に挑むトップ
私の改革論

最終回

本学初の理系学部新設で AI社会に生きる人材育成を

理系の学生や教員との融合による学内の活性化に期待

グローバル化、AI… 理数教育に踏み出す背景

情報技術の世界では、日本は欧米に比べてかなり遅れています。先進諸国に追いつくには、数学と英語の力が不可欠です。しかし、日本の大学生の約半数は私立文系であり、数学的トレーニングが不

足しているのではないのでしょうか。そこに、日本の大学教育の大きな課題があると考えています。

今後、少子化により、人間1人の存在が大きくなります。グローバル化が進めば、誰しも論理的に説得する力がより求められるようになるでしょう。

2000年以上の歴史を持つ数

理系の部局としては、研究センターや独立大学院など、ほかにもいろいろ考えられます。学部にと

だわったのは、理系の視点を持つた学生や教員が一定の割合で常に学内にいることに価値があると考えたからです。

学内に多様性を持たせるため、本学はグローバル教育に力を入れていきます。海外の学生や地方の学生も積極的に受け入れてきました。理系の教育を受けた学生はほとんどいません。多様性確保のためにも、理系の学部が必要だったのです。

純増にこだわったのは、新規にスタートするほうが、理想的な学部像を描けるからです。主に学内のリソースを活用する方法では、思い切った改革ができない可能性があります。そして、文系大学の本学が初の理系学部を作る以上は、他大学の理系学部にはない特徴を持たせるべきなのです。

学長に就任した2020年度の期初はコロナ禍の対応に追われ、学部設置の活動ができませんでした。しかし、コロナ禍が収束するのを待っていたのでは遅いと、半年後の9月には動き出し、基本構想づくりに集中しました。大学の進む方向を決めるコンセプトメイキングを重視し、私を含めて5、

6人からなるプロジェクトチームで、スピード感を持って計画を進めました。

学内のコンセンサスを得るために、私自らこれからの社会に理系ならではの思考力を持つ人材が必要であることや、本学で情報教育を行う意義などを説得して回りまわした。すると、「文系のみで大学にとどまっていけないのか」と考える教員が学内にもかなりいることがわかり、徐々に賛同者が増えていきました。

既存学部を生かし 文理融合の研究推進

新学部がめざしているのは、数理的な理解力をベースとして、情報技術を駆使しながら、「AIではなく人が主役の社会を作る」人材の育成です。

近年、注目されているデータサイエンスなど情報系の学部の中にもありますが、本学は純粋に理系の学部として設置します。それが伝わるよう、学部名にもあえて「数理」の文字を付けています。

1年次は、情報技術に関係の深い数学を中心に学ぶよう設計します。情報技術の発展のスピードは早く、次々に開発される新技術に

学教育は、論理的思考力を鍛えるのに最も適した方法です。その意味でも、大学における数学的なトレーニングはますます重要になると思われれます。

AIを考慮に入れた教育も必要性を増します。2030年には、かなり多くの分野でAIが活用されていることでしょう。すでに、

対応していくには、その根底にある数学的な基礎をしっかりと身に付けることが重要だからです。

2年次になってから、カリキュラムを情報数理系と情報システム系に大きく分け、3年次からのコース別の学修に備える形にします。

3・4年次から3つのコース、「数理・量子情報コース」「AI・データサイエンスコース」「情報システム・セキュリティコース」に分かれます。このコース設定に、本学の情報数理学部が養成する人材像が表れています。

情報数理学部の設置と同時に、研究組織として情報科学融合領域センターも設置することが、改革のポイントです。

この2つをセットにして連合教授会に承認を得ました。本学の既設6学部はいずれも人文・社会科学系統で、これまで長い教育・研究の歴史があります。理系学部を設置する際には、その資産をどう生かすかが課題でした。理系が文系の研究から離れ

明治学院大学 ● 宣教師J.C.ヘボンが1863年に横浜で開いた英学塾「ヘボン塾」を起源とする ▶ 6学部16学科、7研究科12専攻 ▶ 建学の精神「キリスト教による人格教育」のもと、創設者ヘボンが生涯貫いた精神「Do for Others(他者への貢献)」を教育理念に掲げる

取材・文/仲谷宏 撮影/坂井公秋

高度な知的判断が要求される囲碁や将棋でも、人間の能力を超えるAIが登場し、自動運転車に代表されるように、人間の仕事もAIに置き換わりつつあります。

最終的な意思決定は人間が行うにしても、職場やプロジェクト単位では、同僚や部下がAIという時代が間もなく到来するでしょう。AIと協働していくには、AIの能力の性格や範囲を知っておくことが必須なのです。

これから入学する学生は、このような社会で活躍する人材であり、大学への期待や役割が時代とともに変化するのは必然と言えます。

多様性確保のため 「純増」の「学部」を計画

本学では、2024年度に*情報数理学部を新設する計画を進めています。これまでに何度も理系学部の構想を進めようとしてきましたが、実現に至りませんでした。今回、「理系の部局を考えること」を公約に掲げた私が学長に選ばれ、設置に向けて動き出しました。

理系部局新設にあたっては、2つの点を重要視しました。一つは「学部であること、もう一つは「純増」で設置することです。

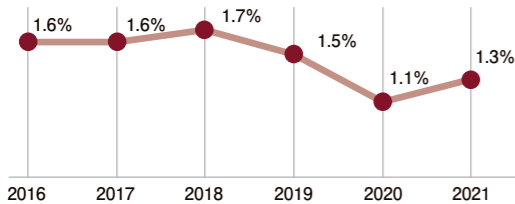
たところにあつて、互いが融合できないのでは、両方を持つメリットが生まれません。

AIやデータサイエンスの新しい手法が生まれれば、既存の学問領域の研究手法も変化します。情報科学融合領域センターが、人文・社会科学領域の研究に合った新しい手法を開発・提案するといった協働の場となることを期待しています。

情報数理学部が新設されれば、これからは、本学にはいなかった学生層が入学してきます。切磋琢磨しながら成長できる環境と、全ての学生に満足のいく教育を提供することに、これまで以上に注力していきます。

注目の経営指標

“学生第一”で中退率低下



2020年度、コロナ禍で学年の始まりをいつにするか悩んだが、4月20日からオンライン講義を実施すると決定。オンライン環境の整備を援助するために、一律5万円の給付も行った。学生にさまざまな出会いの“場”を提供することによって学生の満足度が上がり、中退率の減少として表れると信じている。

* 仮称・設置構想中